

歴史カリキュラム方針

●アカデミアクラス歴史の主題

教科書を「事実が書かれたもの」と捉えず、「解釈によって構築されたもの」「教科書記述者の主義・主張が埋め込まれており、決して中立ではない」との立場をとる。そのうえで教科書記述（用語）を鵜呑みにするのではなく、「記述（用語）の根拠となっている資料や歴史観は何か」ということを問い、生徒が根拠となる資料や価値観を自ら探し、読み解く授業を展開する。そのうえで、「この記述（用語）はどのような視点・枠組みに基づくものか」や「別な視点・枠組みから教科書の記述（用語）を再構成することは可能か」という問いかけをして、教科書の記述をメタ認知できる力を養う。

●カリキュラム方針

- 教科書は「事実が書かれたもの」ではなく、「解釈によって構築されたもの」であり「学習指導要領や執筆者の主義・主張が反映されたもの」という認識をもつ（批判的思考力）

「歴史は暗記」という考えは、「歴史＝過去におきた事実」という認識に基づく。しかし、歴史は現在まで残された資料をもとに誰かが解釈し（解釈性）、これを構築したものである（構築性）。教科書も「執筆者によって解釈された歴史によって構築されたもの」と認識することで、「歴史は暗記」という言説に対抗する。
- 史料批判の姿勢を高める。（批判的思考力）

その資料はいつ・誰が・どのような目的で作成されたかを意識する。
- 「過去より現在の方が優れている」という安易な進歩主義に陥らない。（批判的思考力）

私たちは現在の考え方や常識から過去の事象について価値判断しがちである。しかし、過去の人々は私たちと異なる考え方や常識、環境の中で生きていたため、現在の価値観でのみ過去の事象について判断することは危うさが生じる。そのため、「過去の人々は自分とは異なる見方や考え方をしたかもしれない」という歴史的エンパシーを育み、過去の事象を学ぶ中で、自分の常識（＝価値観）を絶対視しない態度を養う。
- 概念を理解する。（批判的思考力&創造的思考力）

「帝国とは」「国家とは」「民族とは」「武士とは」「古代・中世・近世・近代（時代区分）とは」 etc.
→既習の内容で獲得した概念をその後の学習の中で再構築し、常により納得的な概念に鍛え上げていくことができる。
- 教科書的な語り・記述に対し、問題点（西洋中心史観・ジェンダーなど）を指摘し、そのような語り・記述の背景となる歴史観を明らかにするとともに、それをもとに別な視点から語り・記述を再構成したりすることができる。（実践・実装力）